



入門 日本語教授法

東京YMCA日本語学校
編

創拓社出版

著者

中村 豊美 (2, 8, 10, 15, 21, 22 課担当)

[東京YMCA日本語学校]

立野みどり (3, 7, 11, 13, 16, 19 課担当)

[東京YMCA日本語学校]

安田 芳子 (1, 4, 5, 14, 18, 23 課担当)

[東京YMCA日本語学校]

佐藤乃理子 (6, 9, 12, 17, 20 課担当)

[横浜YMCAACT日本語科]

入門 日本語教授法

1992 年 1 月 25 日 第 1 刷発行

2002 年 8 月 10 日 第 9 刷発行

編者 東京YMCA日本語学校

発行者 飯尾世幸

発行所 株式会社 創拓社出版

東京都千代田区三崎町 2-18-9 〒101-0061

Tel.03(5216)3636 Fax.03(5216)3632 振替00180-9-134142

印刷製本 株式会社 加藤文明社印刷所

©Tōkyō YMCA Nihongogakkō.

Printed in Japan, 1992

ISBN4-87138-138-2 C0081

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社読者係宛御送付下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

入門 日本語教授法

東京YMCA日本語学校
江苏金业学院图书馆
藏书章

創拓社出版

まえがき

日本語を教え始めたころは、教える文型について、最初にどの例文でどうやって提示（導入）しようか、文法書を見たりしながら毎晩明日の授業に備えて悪戦苦闘したものです。

「難しいようです。」「難しいらしいです。」は、どこが違いますか、という質問に即座に答えられなかったり、「受身の形はつくれます。でもいつ使えますか。」と聞かれて、教師としての自信をなくしたり、クラスでも苦戦してきました。

クラスにはいろいろな国籍の学生がいるので、日本語だけを使って、いわゆる直接法で教えざるを得ません。

そのために、その文型が最も自然に使われ、かつ皆が理解できる場面の絵が必要です。また学生が文型の意味を理解しているか教師が確認するため、「わかりましたか。」ではなく、どういう質問をしたらよいのか、常に考えてきました。分かりやすい絵と適切な質問をするためには、文型の意味を正しく分析していなければいけないと痛感しています。

この度、東京 YMCA の日本語コース開講以来、お世話になってきた早川嘉春先生のお力添で、創拓社出版から、私達が今まで文型の意味について調べたり、考えたりしてきたことや、導入のやり方の例、練習などを出版することになりました。いまだに授業の出来不出来に一喜一憂する身で、このような本を出版することに、かなりのためらいがありますが、これから、日本語を教えられる方、教えてみて、いろいろな疑問にぶつかっておられる方に、少しでもお役に立てば望外の喜びです。また、私達なりに実際の授業を通して考えた説明に対しては、まだ不備な点や、間違いが多々あるかもしれませんが、多くの方々から御意見をたまわる良い機会だと思っております。

1991 年 12 月

使 い 方

I 本書は23課からなっています。すべて初級の教科書に出てくる文型です。

各課の構成は次のようになっています。

- 1 文型の意味について：文型の意味や類似の表現とどこが違うか分析
- 2 文法事項：主に活用形の作り方、接続、助詞等の文法
- 3 問題となる点：学生から出てくる疑問を中心に問題点の説明
- 4 導入・練習：導入の一例と練習

II 導入について

導入では絵を見ながら教師は誘導質問して、なるべく学生から答を引き出すようにしていきます。新しい文型だから出るはずがない場合ももちろんありますが、予習してきた人もいるかも知れません。目標の文型にたどりついたら、全員が正しく言えるように一人一人に言わせたり、コースなどで練習します。教師は文型が正しく理解されているかどうかチェックするために確認の質問をします。

辞書形、て形、可能形、意志形、受身形、使役形等の形は数例を提示した後で、形の作り方を説明、あるいは学生に作り方を考えさせます。

動詞のフラッシュ・カード等で3分以内位であれば、機械的な練習も必要だと思います。

注1 (*私は食べたいです)のように(*)の中にある文は導入で一般的に予想される非文です。

注2 教師の発話が不自然に感じられる場合があるのは、既習語彙・文型を使って質問するためです。

注3 (出なければ教える)というのは、教師の誘導の質問に対して、目標の文型が引き出せない場合には教えるということです。実際の授

業では学生からいろいろな答が出てきますが、本書の導入ではこの部分は省略してあります。

III 練習について

練習は紙数に限りがあり、絵を見ながらの基本的な練習と短い会話、インタビュー・ゲーム等しか掲載できませんでした。これだけでは練習が十分ではないと思いますので、御使用の教科書と合せてお使い下さい。

IV 本書での用語について：（ ）内は学校文法での言い方です。

*動詞のグループ分け

- 1 グループ（5 段活用動詞）
- 2 グループ（上一段・下一段活用動詞）
- 3 グループ（カ行・サ行変格活用動詞）

*い形容詞（形容詞）な形容詞（形容動詞）

*普通体（だ体）

普通体というのは「です・ます体」（丁寧体）に対する用語です。

動詞、形容詞、名詞それぞれに普通体があります。

例：動詞（普通体） （です・ます体）

書く 書きます

書かない 書きません

書いた 書きました

書かなかった 書きませんでした

*例文の前に付いている×は非文を表し、△は非文と言い切れない文を表しています。

V 音声・文字の指導については本書では触れておりません。

目次

まえがき 3

使い方 4

1課 これは日本語で何ですか。——こ・そ・あ・ど 7

2課 高い時計ですね。——い形容詞・な形容詞 20

3課 図書室に新聞があります。——存在 32

4課 今度の日曜日に何をしますか。——時制(テンス) 42

5課 朝7時に起きて、顔を洗って、新聞を読みます。——～て、～て 53

6課 あさ子さんは今テレビを見えています。——～ている 63

7課 私は友達がほしいです。——希望・願望 72

8課 映画を見に行きませんか。——提案・申し出・勧誘 84

9課 日本語が話せますか。——可能形 93

10課 富士山に登ったことがありますか。——経験 103

11課 来年コンピューターの勉強をしようと思っています。——意志 111

12課 入ってもいいですか。——許可・禁止 122

13課 この本は難しそうです。——様態 134

14課 雨が降りはじめたようです。——推量(ようだ・らしい) 144

15課 熱があったので、学校を休みました。——理由・原因 157

16課 先月たくさん働いたのに、給料が増えませんでした。——逆接 171

17課 写真が飾ってあります。——～ている・～である・～ておく 179

18課 寒くなってきました。——変化 190

19課 母にこづかいをもらいました。——授受動詞 201

20課 雨に降られて困りました。——受身 219

21課 お母さんは あさ子さんに掃除をさせました。——使役・使役受身 232

22課 勉強すれば、成績が上がりますよ。——条件 244

23課 社長はゴルフにいらっしゃいます。——敬語 265

参考文献 283

索引 285

装丁 渡辺千尋・イラスト 石井正員

1 課

これは日本語で何ですか。

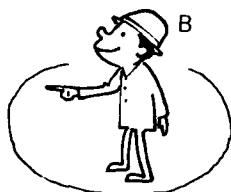
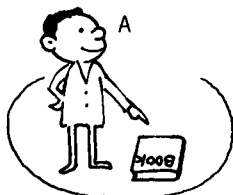
こ・そ・あ・ど

文型の意味について

1

- 1 A: これはあなたの本ですか。
B: いいえ、それは田中さんの本です。
2 A: これはだれのプリントですか。
B: あっ、これは私のです。

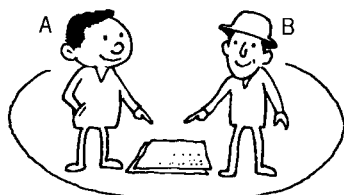
1ではAは本を手を持っているか、あるいはほぼ触れそうなところに本がある。BはAと本から少し離れた所にいる。



AとBは異なる領域にいる。本はAと同じ領域内にあるので、Aにとっては「これ」、Bにとっては「それ」となる。「これ」と「それ」は、「A領域」対「B領域」という、対立した関係にある。対立関係になっている為、「これは」で聞かれたら「それは」で、「それは」で聞かれたら「これは」で答えることになる。

これ $\longleftrightarrow$ それ

2ではA、Bは二人の目の前にあるプリントに触るようにして話している。



これ $\longleftrightarrow$ これ

この場合、A、Bは同じ領域内にいる。しかも話題になっているプリントも同じ領域内にあるので、「これは」で聞かれても答えは「これは」になる。

以上のことから、「これ」「それ」には二つの型がある。即ち、1のように話し手と聞き手が異なった領域にいる「**領域対立型**」と、2のように同じ領域にいる「**領域共有型**」である。更に領域共有型について見てみよう。

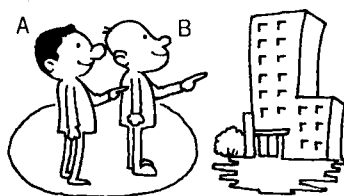
3 A：このビルの隣に見えるその大きな建物、**それは**病院ですか。

B：いいえ、**それは**ホテルですよ。

4 A：**あれ**は東京タワーですか。

B：いいえ、**あれ**は日本テレビのタワーですよ。

3ではAとBは同じ窓から外を眺めながら、すぐ近くに見える建物について話している。

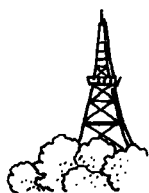
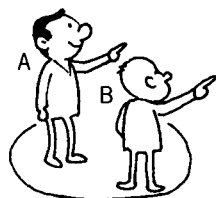


それ $\longleftrightarrow$ それ

A、Bは同じ領域にいることから領域共有型ではあるが、話題となっている「建物」はA、Bの領域外にある点が2との違いである。しかも「建物」はA、Bの領域からそれ程離れていないので「それ」と言っており、4の「あれ」とはこの点が違っている。

4ではAとBは同じ方向を眺めながら、二人にとってかなり離れていると

感じている「タワー」について話している。



あれ $\longleftrightarrow$ あれ

「あれ」というのは常にA、Bが同じ領域にいて、領域外の、しかも「それ」よりはかなり離れている物が話題になる場合である。

1～4をまとめると次のようになる。

- | | | | | |
|----------|---|---|-----------------------|---|
| a) 領域対立型 | 1 | こ | $\longleftrightarrow$ | そ |
| b) 領域共有型 | 2 | こ | $\longleftrightarrow$ | こ |
| | 3 | そ | $\longleftrightarrow$ | そ |
| | 4 | あ | $\longleftrightarrow$ | あ |

「これ」「それ」「あれ」は物を指示する時に使われる言葉である。疑問詞「どれ」を加えて「こ・そ・あ・ど」が語頭に来る指示語、疑問詞は一つの体系を形成しており、「こそあど体系」と呼ばれている。「ど」系の言葉は、「こ」系、「そ」系、「あ」系とは性質が異なるのでここでは触れない。（「文法事項」参照）

今まで述べてきたことは、実際に話している場面にある事物、直接目で見ることができる事物を指示する用法である。（＜現場指示＞）

2

5 A：この間二人で見つけた**あの**店、昨日入ってみましたよ。

B：ああ、**あの**店ね。どうでしたか。

AとBは今「店」が見える所に立っているわけではない。二人が頭の中に描いた「店」が話題になっている。このように「こそあど体系」には＜現場

指示＞のほかに、会話や文の流れの中で観念的に頭の中で描いた対象を指示する場合もある。（＜文脈指示＞）

5において、AとBは共に「店」についてよく知っており、また相手も自分と同じように知っている、ということも分かっている。

「あ」系は話し手、聞き手が共に話題の対象をよく知っている場合にのみ使われる。

6 A：この間新宿で変な人を見ましたよ。**その**人、大きな声で歌いながら歩いているんです。

B：じゃ、**その**人のことをみんなが振り向いて見たでしょう。

「そ」系は、話し手は話題の対象（ここでは「変な人」）を既に知っているが聞き手は知らないだろうと想定した場合（話し手Aの場合）、または、話し手は相手が持ち出した対象を知らない場合（話し手Bの場合）に用いられる。

7 A：昨日久し振りに同級生から電話があって……**この**人昔から話し好きなもので……。

B：ああ、分かった、**その**（×**この**）人と一時間以上も話していたでしょう。

「こ」系は、話し手が話題の対象を既に知っている場合に使うことができる。この点は「そ」系と同じである。（6 Aの場合）7 Bで「こ」系が使えないのは、話し手は、話題の対象を知らないからである。

* 「こ」系は、その話題を最初に持ち出した人しか使えない。

◇ A：昨日同級生の田中さんという人にばったり会いましたよ。

× B：**この**人なら私も知っていますよ。前に紹介してくれたじゃありませんか。

- 8 A：消費税をめぐる論議がテレビ、新聞で盛んに行われているが、
- a) **その**論議は平行線のままで、何の実りもない。
- b) **この**問題について我々国民の一人一人が長期的展望に立ってじっくり考えるべきだと思う。

8は6、7と異なり、話し手が話題の対象を心理的にどうとらえるかによって、「そ」系になったり「こ」系になったりするものである。例えば、a)では話し手は話題の対象を自分とは距離が離れているものと感じ、一般的なものとしてとらえているので「そ」系を用いている。一方、b)では話し手にとって話題の対象は身近な問題であり、特別な関心、感情をもって対象をとらえているため「こ」系を用いている。

文が展開していく中で、文中の「こそあ」はなかなか説明がつきにくい。一般的に、客観的な叙述をする場合は「そ」系が多く用いられ、話し手（筆者）が感情を強く出したところでは「こ」系が用いられる、と言える。

文 法 事 項

1 「こそあど体系」は次のようになっている。

	物事	場所	方向		物 事 人	状態	方法
			丁寧	普通			
こ系	これ	ここ	こちら	こっち	この	こんな	こう
そ系	それ	そこ	そちら	そっち	その	そんな	そう
あ系	あれ	あそこ	あちら	あっち	あの	あんな	ああ
ど系	どれ	どこ	どちら	どっち	どの	どんな	どう

2 指示する対象物と話し手、聞き手との距離から、「こ」系を近称、「そ」系を中称、「あ」系を遠称、「ど」系を不定称ということもあるが、前項で述べたように絶対的な距離ではなく、心理的な領域という考え方が根本にある。

医者：(触診しながら) どこが痛いんですか。ここですか。

患者：いいえ。

医者：じゃ、ここ？

患者：はい、そこです。

患者にとって自分の体であるから絶対的な距離が一番近いわけだが、医者が「ここ」と言った時点で自分の体は自分の領域内ではなく、医者領域内であると感じ、「そこ」と言っているのである。

3 方向を示す「こそあど」は人、物、場所にも使う。

◇こちらは田中さんです。

◇こちらのかばんはいかがでしょうか。

◇受付はこちらです。

4 「こそあど体系」には上記のほかにも数多くの発展形がある。

例 ・こういう、こうした、このような

・こんなに、このように、こうして

5 ① A：どれがほしいですか。

B：これがほしいです。

② A：どれかほしいですか。

B：はい、ほしいです。

B'：いいえ、どれもほしくありません。

「ど」系は疑問詞であるから、「なに」、「だれ」等と同じように「はい／いいえ」では答えられない質問文を作る (①)。「ど」係に「か」が付くと、「はい／いいえ」で答える質問文になる (②)。答えが否定の時は②B'のように「か」を取って「も」を付ける。

「疑問詞＋か」、「疑問詞＋も」と助詞の関係は次のようになっている。

* 「を」、「が」は「疑問詞＋か」、「疑問詞＋も」と共には使わない。

◇何か ㊦ 食べましたか。 いいえ、何も食べませんでした。

◇だれか 涙 いましたか。 いいえ、だれもいませんでした。

* 「へ」、「に」は省略可能だが、「に」には省略できない場合もある。

◇どこか(へ)行きましたか。 いいえ、どこ(へ)も行きませんでした。

◇どこか(に)合格しましたか。 いいえ、どこ(に)も合格しませんでした。

◇だれかに聞きましたか。 いいえ、だれにも聞きませんでした。

* 「から」、「と」は「疑問詞+か」、「疑問詞+も」と共に使われる。

◇どこかから (／どこからか) 電話がありましたか。

いいえ、どこからもありませんでした。

◇だれかと似ていますか。 いいえ、だれとも似ていません。

問題となる点

1 「こ」系、「そ」系に関して領域対立型しか扱っていない教科書が多く、教師も「これ」で聞かれたら「それ」で答えると機械的に教え、練習する傾向がある。しかし実際には領域共有型も多いわけで、両方あることを初級段階から認識させるべきである。

2 実際の会話において、「これは何ですか」に対して「それは／これは本です」という答えは不自然で、「本です」が自然である。ただし「こそあ」の意味把握の為に、また学生が正しく理解したかどうかの確認の為に最初の段階ではこの不自然な練習が心要となる。定着した後で短い答え方のほうが自然であると教える必要がある。

3 初級で教えるのは＜現場指示＞が主であるが、＜文脈指示＞が出てこないわけではない。次は実際に初級の学生が書いた作文である。

「夏休みに日光へ行きました。あそこで東照宮を見ました。韓国の同じ時代の色に比べて、その時代にそんなきれいな色を作ることができたなんて、信じられませんでした。」

教師は当然「あそこで」→「そこで」、「その時代」→「あの時代」、「そんなきれいな色」→「あんな (／こんな) きれいな色」と直すであろ

う。ただしなぜこのように直すのか学生に説明するのに苦勞する。

導 入 ・ 練 習

日本語教育の最初の時間は「これは何ですか。」「本です。」のような会話がよく行われる。発展形「これは日本語で何ですか。」を教えれば、教師は学生がどの程度物の名前を知っているか探ることができ、また学生も身近な物の名前を覚えられるので有効である。

1 導入 「これ」 (1)

先生：(学生の本に触れて回りながら) 本、(本……)。

学生：本、本。

先生：(本を手に取り指しながら) **これ**は本です。(繰り返す)

学生：(学生一人一人に自分の本を持たせる) **これ**は本です。

先生：(身近な物を手に取り) 紙、(紙……)。

学生：紙、紙。

先生：**これ**は紙です。

学生：(一人一人が紙を持って) **これ**は紙です。

(物を変えて、以上を繰り返す)

2 導入 「それ」 (1)

学生1：(学生1に本を持たせる) これは本です。

先生：(学生1の本を指して) **それ**は本です。

学生2：(同様に学生1の本を指し) **それ**は本です。

先生：(自分の本を持ち) これは本です。

学生：(先生の本を指し) **それ**は本です。

3 導入「あれ」

先生：（学生の席のそばに立ち、離れている時計を指し）

あれは時計です。

学生：**あれ**は時計です。

4 導入「これ」（2）

先生：（学生1の席に行き、学生1の本を触り）**これ**は本です。

学生1：（同じ本を触り）**これ**は本です。

先生：（学生1の本を持ち上げ）これは本です。

学生1：（先生が持っている本を指し）それは本です。

先生：（もう一度机の上に本を置いて、共に触って学生1に）**これ**は本です。

学生1：**これ**は本です。

5 導入「それ」（2）

先生：（学生1の席に行き、少し離れた本を指し）**それ**は本です。

学生1：（同じ本を指し）**それ**は本です。

先生：（学生1から少し離れて、本を手に取り）これは本です。

学生1：（先生が持っている本を指し）**それ**は本です。

1～5の導入が済んだところで、絵で確認する。